

友利幸之介, 京極 真, 竹林 崇(執筆)

長山洋史(執筆協力)

作業で創るエビデンス

作業療法士のための研究法の学びかた

評者 藤本修平

京都大学大学院・社会健康医学

これからの時代, リハビリテーション医療における意思決定には, 臨床現場で創られた実証結果であるエビデンスが求められることは想像に難くない。そのエビデンスとは何か? 臨床および社会で生かすための幅広い研究法エッセンスを学べる書籍が本書である。

本書の構成として小生が捉えた特徴的な点は3つである。1点目は研究デザインの網羅性, 2点目はエビデンスの活用法にも触れている実用性(実践性), 3点目はマンガを用いた理解へのリーチ性である。

研究デザインを網羅的かつ適切に示した研究法の書籍は, 作業療法業界のみならず理学療法業界, リハビリテーション業界でもあまり見かけない。研究はデザインが命である一方で, 研究デザインの理解を得ずに研究が進められてきた背景がある。多くの臨床研究者の質があらためて見直されているなか, 本書の網羅性には公衆衛生学が専門である小生もうなった。例えば, 臨床に従事している者は知識が必須である“臨床的に意味のある最小の差”を表す Minimal Clinically Important Difference(MCID)や費用対効果分析の説明のように, 主にそれらの専門書でしか見かけないような痒いところにも手が届いているのが印象的であった。

2点目で挙げたエビデンスの活用法については, 読者への気遣いが感じられる。これまでの研究法の書籍類は得てして, 研究者のための書籍になっていた。当然, 内容は難しくとっかかりにくい。他方で, 入門書は割愛されている部分も多く, 研究への誤解を生んでいた。しかし, 何のために研究を行うのか? という原点に立ち返ってみると, 臨床で活用されることも目的の1つである。“エビデンスを活用する(Evidence-based practice)”という視点から本書にたどり着くことで, 臨床での活用まで見据えて, エビデンスおよび研究法への理解を進めること

ができるだろう。

3点目は, いわゆる読者へのリーチ性に配慮したエンタメの導入である。本書のなかでも紹介されているが, エビデンスは“つくる・つたえる・つかう”という側面がある。臨床で目の前の患者さんに対峙する際, まずはつたえる・つかうという能力が必要であるが, 当然書籍も読者の理解まで踏み込まなければならない。近年, エンタメを用いた行動変容が検証されているが, まさに本書も研究に踏み込むうえでの“あるある”をマンガに載せ, 本論へ誘導しているのが印象的であった。

タラレバではあるが, 小生が理学療法士になった10年前, このような書籍があればどれだけ助かったかと現在本書を手にとれる療法士をうらやましく思う。作業療法や理学療法, 言語聴覚療法のプレゼンスを高めるためのエビデンス創出, その臨床応用を担う使命を少しでも感じる, もしくは何か今の自分にもどかしさを感じるのであれば, ぜひ本書を手にとってほしい。著者らの作業療法への思いや実証をもとにした業界を発展させるエッセンスとともに, 読者のステップアップを手助けしてくれることだろう。

B5判・336頁
定価: 本体 4,000 円 + 税
医学書院刊, 2019 年